Part 2

PROFILE REPORTS

PROFILE REPORTS

Part 2

研究者たちの素顔

「夢の医療」の実用化に向け、日々研究を続ける研究者たちは「未来医療への挑戦者」と言えるだろう。第一線で活躍する先生方に若手時代から現在までの道のりを振り返ってもらった。彼らの意外な素顔に迫る。

研究者たちの素顔 Vol.01

石川 烈

出会いと交流が人としての幅を広げてくれる

豊富な海外経験を基に、歯科啓蒙のために歯を題材にしたフランスの絵本やシャンソンの翻訳など研究以外でも幅広い活動をされてきた石川烈先生。73歳になった今なお、歯科医として歯周組織再生の研究に精力的に取り組んでおられる先生に若手時代を語っていただきました。

Interviewer:
村岡・秋元・宮田

歯科医に向いているか自分を見つめなおした

——先生は、どのような子ども時代を過されたのでしょうか？

石川烈（以下、石川） 私が生まれたのは1940年（昭和15年）で、太平洋戦争が始まる1年前でした。5人きょうだいの3番目。生まれ落ちたのは大阪ですが、父親の仕事が京都の大学でしたので、その後すぐに京都に移り、ついで東京、川崎と移り、やがて神奈川県立川崎高校に入り、それから東京医科歯科大学に進みました。

まあ、わがままでマイペースな子どもでした。自己主張が強くて、学校の先生からすごく好かれる場合も、ものすごく嫌われる場合もありましたね。

——子どもの頃、科学や医学に興味を持たれたきっかけはあったのでしょうか？

石川 いや、ない（笑）。自分が本当に何に向いているかわからなかった。大学受験のときも、いろいろな学部を受けました。当時の国立大学の入試制度では一期校、二期校と分かれていて、一期の段階でそれなりの大学には受かっていました。医科歯科大学は二期校で競争倍率だけはやたらと高く、友達と「受かったら何かもらえる」という賭けをして願書を出しておいたのです。リラックスした気分で受けたら受かってしまった。

一つだけ言えることは、生物学は好きだったんです。父親は物理学が専門でしたが、あれはどうしても苦手でした。最初に習う先生の質によって、ずいぶん左右されるんじゃないかという気が今もします。導入部をうまく教えてもらえれば、すっと入っていけるのだけれど、変な数式ばかり覚えろと言われて、どうしても好きになれなかったですね。

でも、医学部に進むということであれば、やはり人間の死と向き合わなければいけない。「自分には何でもできるんだ」という自負があった一方で、「誰かの死の責任を持つことができるだろうか？」「自分はそれだけのことをできる人間だろうか？」ということは、何度も自問していました。

自分が何に向いているか、大学受験のときもわからなかった。

——幼い頃に戦争の時代を経験したことが、「人の死」のとらえ方に影響したのでしょうか？

石川 そうかもしれませんね。とにかく、「自分は医師になって人の死を看取るようなことは無理だ。もう少し楽なほうが向いている」ということは考えました。

入学するやいなや、教養の2年間は安保闘争ばかりでした。いわゆる60年安保の時代ですね。積極的に参加しようと思わなくても、大学の前にバスが待っていて、うっかり乗ったら国会に連れていかれてしまうのです。一応、授業はあったけれど、休んでも何も言われないし、先生も学生と一緒に討議したりね。非常に特殊な時代でした。続いて70年安保の時代になると、運動が先鋭化してしまって、凄惨なことになりましたね。そのとき私はちょうど外国へ出ていたのですが、卒業式ができなかったり、クラスが完全に派閥に分かれてしまって互いに口もきかなかったり、という状況だったそうです。

いずれにしても、大学では歯科医としての勉強をちゃんとやりました。ただ、国家試験に受かった後、登録は2年くらい先

にした。それでも誰も何も言わない。だから、ある意味では、ものすごくのんびりした時代でした。

——登録までの2年間は留学をされていたのですか？

石川　いや、大学院に進む頃から、自分を見つめ直す旅というか、「自分は歯科医に向いているのか？」と、改めて考え出すわけです。道を歩いていて小さな歯科医院を見たら、「おれもこんなふうになるのかな？」と。収入は得られるかもしれないけれど、あまり面白くないというか、何かもっとやることがあるのではないかと思ってしまう。

それに、歯科の教育そのものも、習っていてあまり面白くなかったのです。歯科の学問体系が、私に言わせれば物足りなく感じた。虫歯はどうやって治療するか、もう少し悪くなったら神経の治療をどうするか、次は抜いたらどうするか、入れ歯はどうするか……。歯科の学科というのは、当たり前かもしれませんが、原因探索より治療方法の授業がずっと続いていくわけです。

——もっと視野を広く持ちたかったということでしょうか？

石川　医科歯科大学のいいところの一つは、教養の科目、それから基礎の科目の半分程度は、医学部生も歯学部生も一緒に受けられること。解剖なども一緒。そういう交流の中で学んでいましたから、いざ専門の科目に入って、「思っていたことと違うな」という感じはありましたね。そうはいっても、歯科の中でサイエンティフィックに、きちっと病因に基づいた研究ができるのは何かと考えたときに、歯周病が一番いいのではないかと思った。私は入れ歯を作ってもあまり上手ではなかった。中には非常に器用で、心優しくて、とてもきれいに作る学生もいましたが、そういう人はやはり補綴科に行く。医科に似たことをやりたい人は口腔外科に行く。当時は矯正も人気があった。しかし、歯周病に行く人はあまりいなかったのです。

街の歯科医院を見て「自分は向いているか」と何度も自問自答した。

——では、超先駆けですね？

石川　結果的には。当時は、「何でそんなところに行くの？」と、皆に言われましたよ。実際、最初はプラークコントロールやブラッシングというようなことばかりやらされて、「これがおれの望んでいたことか」と、また自問自答して……。

でも、医科歯科大学の歯周病学の初代教授が新潟大学の病理学からこられた今川与曹先生だったのですが、何となく意気投合するというか、私の考え方と似ていた。今川先生が「君は何をやりたいの？」と言われたので、「もうちょっと生物学的なことをやりたいです」と言って、歯肉の組織培養をやるようになりました。

ジュネーブ大学でフランス語に悪戦苦闘

——その後、大学院の途中で、海外に出られたそうですが。

石川　大学院3年のとき、スイスのジュネーブ大学で助手のポジションがあるという話がありました。先に1人だけすでに行かれた先生がいましたが、それは講師くらいのクラスでした。誰か手を挙げるかなと思っていたら、全部フランス語で講義をする必要があるからと怖がって、誰も手を挙げない。私なんて一番若かったのですが、それでも行かせてくれるかと手を挙げたら、何とお鉢が回ってきた。

それで慌てて、お茶の水にあるアテネ・フランセにフランス語を習いに行ったけれども、全然分からなかった。ドイツ語は必須科目だったから、ある程度やっていましたが、フランス語は付け焼刃で3か月勉強したくらいじゃ、どうにもならなかった。オーディオビジュアル科というところに入ったら、初めからフランス語で質問される。絵を見せられて答えを迫られる。かなりレベルの高い人が入る科だったのです。もうちんぷんかんぷんで、何も分からなくて、ぽけーっとしていた。そういうところはわりと大胆なのです。ある意味では厚かましい。周りの人がカンニングペーパーを回してくれて、それを見て答えていた（笑）。

現地に渡ったのは、大学院4年生の6月頃だったかな。当時は今とは違って、「外国へ行くならば休学しなければいかん」と言われていたので、気にせず休学しました。あと半年我慢していれば修了できたのですが、もう学位論文は書き上げてあったので、心残りは何もなかったのです。

——大胆な行動ですね。

石川　今の若い人は見ていて本当にかわいそうなぐらい就職も大変だし、助手にもなかなかなれないじゃないですか。でも当時は、大学院を出れば、なんとか助手になれる時代でした。だから、先のことを心配しなくてよかった。

出発は羽田空港からでしたが、バス1台で皆が見送ってくれるのです。当時は、誰かが海外に行くときは皆で羽田まで行って、万歳三唱して見送った。小田実の『何でも見てやろう』がはやっていた時代で、「日本の中にいても道は開けない」という感じを、皆がある程度共有していたんじゃないかな。

——語学面での不安は解消されていたのでしょうか？

石川　フランス語は不安だらけでしたよ。ある程度、英語は勉強していましたが。ちょうど今

の代々木公園が米軍のキャンプ地だった時代で、彼らの奥さんが1時間いくらで英語を教えてくれていたので、そこで習っていました。ジュネーブ大学に赴任したら、すぐに臨床に出されましたから、技術的なことはできても言葉でつまずけばアウトです。「お前は役に立たないから帰れ」と言われて帰国させられた人が何人かいました。

ジュネーブはWHOなどの国際機関を擁する美しい街で、多くの日本人も住んでいましたから、私も最初はそこに住みたかった。ところが、私の教授が「おまえはちゃんと言葉を覚えなければいけない」と言って、スイス人しか住んでいない旧市街にアパートを取ってくれ、そこに住むことになりました。ある日を境に、まったく日本人と会わない生活です。そして、午前中は臨床で学生の指導、午後は研究という毎日でした。

——学生の指導というのは、フランス語で現地の学生たちに講義をしたということでしょうか？

石川 そうです。アテネ・フランセで学んだことは全然通用しなくて、技術的なものは持っているけれど、それを伝えるフランス語ができない。患者さんとの会話内容や手術内容のレポートもフランス語で書かないといけない。どうしようかと思っていたら、学生の中に英語のできる人がいて、私は彼に「ちゃんと教えるから、君はおれのためにレポートを書いたり、書き方を教えたりしろ」と言って、助けてもらったりしました。

格好をつけないで素直に飛び込んでいくことが必要。

今、もう一度そんな環境に身を置いたらと思うとゾッとするけれど、単身海外に渡って、「とにかくここから追い出されたらいけない」と思って必死にやれば、結構できるようになるものです。

——思い切って行くと、そこに何かがある。普通は計算して行くけれども、ぱっと思い込みで行って、だけれど熱意があるから助けてくれる人も現れるということでしょうか？

石川 格好をつけないで素直に飛び込んでいくことですね。そして、にこにこして周りの人にあいさつをする。あまり積極的過ぎるのも異常だけれど（笑）、自然体で必要なことをきちんとやる。そういうのは若さの特権でしょう。あいさつというのは言葉ではないと思う。まず、心と心。すると、次に会ったときに、すっといろいろなことを聞ける。でも、顔を反らしてまともにあいさつしなかったら、次に何か聞いても「あいつ、変なやつだな」となるんじゃないかな。まあ、私も相当変なやつだとは言われたけれど（笑）。

——奥様との出会いはジュネーブ留学時代とうかがっているのですが。

石川 言葉ができないうちは誰も声をかけてくれないけれど、ある程度言葉が話せるようになってきて、「あいつは面白い人間だ」ということになると、皆がホームパーティーに呼んでくれるようになります。日本でいうマンションみたいなところに住んでいて、自宅でパーティーを開く。年頃の男女それぞれ4～5人ずつ、合わせて10人ぐらいで週末は連日のようにパーティーです。ワインを1本持っていく、ちょっと花を持っていく、それでいいのです。すると、自分もスイス人になったような気になる。ある日、「部屋の片隅に変なやつがいるな」と思ってよく見ると、鏡に映った自分だった（笑）。そんなことをしているうちに友達が紹介してくれたのが今の妻です。

——それからお二人で日本に？

石川 そうです。私の両親に「もしかしたら結婚するかもしれない」と言ったら、「うまくいくわけがないから絶対にやめろ」と言って大反対。向こうの両親は別に何も言わなかった。お互いの国が距離的に離れ過ぎていることも懸念材料だったのでしょうが、妻は「一緒に日本へ行く」と言うので、向こうで結婚式を挙げてしまったわけです。

——奥様は情熱的な方ですね。

石川 いや、あまり情熱的ではなくて、しっかりしているんだけれど……。本当に、なぜ私にほれたのかは、今でも分からないですね（笑）。妻は研究者ではありませんが、私がやっている研究をいつも応援してくれています。結婚してもう40年ですが、仲良くやっていますよ。一方で、40年たとうが考え方が合わないということもしょっちゅうですが、それはある意味当たり前ですよね。

人のまねではなくオリジナリティーを

——奥様と一緒に日本に戻られてからは、どのような研究をされていたのでしょうか？

石川 30歳で大学院を修了して2年間助手をやっていましたが、「また海外で研究したい」という思いがわき上がってきて、文部省（当時）の在外研究

結婚式での1枚。左側の男性が石川先生で中央の女性が奥様。

員制度に応募したら受かってしまった。33〜35歳までの2年間、またスイスに渡りました。

合わせて4年もスイスにいると語学力もかなりついてきたので、帰国して講師にしてもらってからは研究論文をたくさん書かせてもらいました。1977年にWHOの国際会議がモスクワで開かれたとき、予防歯科の教授が「おれが呼ばれているんだけれど、これはおれの専門ではないから、お前が行くか？」と言われて行かせてもらいました。そこで、世界の錚々（そうそう）たるトップリーダーたちと一緒に報告書を作ったりしたわけです。

そうして人の輪も広がって、その後いくつかの国を渡り歩きながら研究を続けました。だから皆からは「お前みたいに大学に籍を置きながら外国にばかり行っているやつはけしからん」と言われました（笑）。

——先生は豊富な海外経験を活かして歯科の啓蒙のためにシャンソンの訳詞をされた、とうかがいましたが？

石川 昔、歯科医院の中には、汚い歯周病の写真ばかり並べて、「放っておいたらこんなに悪くなりますよ」と脅すやり方をしていました。私はそれでは絶対に駄目だと思いました。スイスへ行ったときの経験から、人の心を和ませないと人はついてきてくれない。きれいなものを見せて、「こういうふうにきれいになりたい」となるほうが人はついてくる。それで、ちょうど歯科の啓蒙書を作ってほしいと頼まれたときに、何か歯について歌っている歌はないかと調べたけれど、日本にはあまりなかったのです。そのとき、妻が「La vie c'est comme une dent」（人生は歯のようなもの）を教えてくれました。フランスの有名な詩人が詩を書いて、それを有名なシャンソン歌手が歌っているのです。さっそく権利上の処理をして、それを載せた本を作りました。ほかにもいくつか、同様の仕事をしています。

——楽しくて、オリジナリティーあふれるお仕事ですね。

石川 それは大事です。それを私はジュネーブ大学で学んだのですが、教授から「自分のオリジナリティーのある研究をやれ、人のまねをするな」ということを盛んに言われました。当時は「日本はまねばかりする」とバッシングされていた時代です。スイスでも何度も大げんかをしました。例えば「日本の時計なんて、キロいくらだ」と言うから、「日本は今、クオーツという特殊な技術を開発していて、そのうちすごく精巧な時計ができるから、お前さんらはひどい目に遭うぞ」と言ってやった。それで本当にそうなった。外国にいると非常に愛国者になってしまうんですよ（笑）。

教授に「オリジナリティーのある研究をやれ、人のまねをするな」と盛んに言われた。

同じように、せっかく本を作るなら、今までなかったような本を作ろうと。意地を張っているわけではないけれど、できればそのほうがいい。やることなすことがナンバーワンよりオンリーワンの世界です。そういう気持ちをずっと持っていると、面白いものができるということでしょうか？

——いい意味での反骨精神というか、メインストリームには乗らないぞということも必要なのですね。

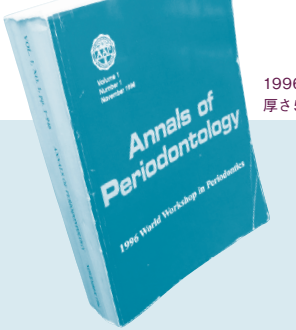
石川 そう、なかなか乗りにくいし、仮に乗っても照れてさっさと降りてしまう。照れくさいと言えば、これは非常にいい思い出なんですが、アテネ大学から名誉博士号をもらったときのことです。スイスに4年間いましたので、ギリシャからの留学生もたくさん来ていて、ずっと彼らの研究指導やっていました。彼らが国に帰ってアテネ大学の教授になる。そうした縁あって、日本人では私だけなのですが、アテネ大学の名誉博士号をいただいきました。そのときは本当に神殿作りの建物の中で講義をやったんです。妻と子どもを連れて行きまして、本当にいい思い出です。

尻込みせず人と交流を出会いが幅を広げる

——先生のこれからの夢を聞かせてくださいますか？

石川 ゴルフでバーディーラッシュを決めることでしょうか（笑）。ゴルフは面白いスポーツです。私は大学でテニスをやっていたのですが、テニスは対戦相手がいます。もちろんゴルフも一緒にラウンドする人がいますが、スタートしてからホールアウトするまで、要するに全部自分の責任なのです。それでいて、一緒に回っている人からも

タイ歯周病学会より名誉会員証を授与される。



1996年に開催された米国でのWorld Workshop in Periodontics
厚さ5cm以上の報告書。140名の参加者で日本人は一人だけであった。

1995年オーストラリア、ゴールドコーストでアジアパシフィック歯周病学会（15カ国参加）の第1回会議を開催した。現在まで2年毎に開催されている。

タイ歯周病学会のメンバーと会食。

のすごく影響を受ける。他の人がすごくうまいと「よし抜いてやろう」とか、すごく飛ばすと「こっちも飛ばしてやろう」とか思ってしまいますね。研究と同じです。研究も、いろいろあるけれど、最後は全部自分の責任じゃないですか。だから、きちっとした計画を立てて、どこへ飛ばして、どうやってカップに入れて……という自分自身の作戦を練らなければいけません。

でも、思った通りには飛ばない。石川遼君でも池ポチャをやる。ゴルフはフラストレーションのゲームなのです。それをフラストレーションと考えたら駄目で、「おれはまだ実力が足りないんだ」「もっと自分の思ったところへきちっと持っていけるよう技術を高めないといけないんだ」と考えると、あまり腹も立たないものです（笑）。だから、ぜひ皆さんもゴルフを……。

——若い人の間でも、一部流行っていますね。

石川 チャンスがあればぜひ。私がゴルフを始めたのは35歳からですから。ゴルフはいろいろな人と楽しく回れるし、一緒に回るとその人の性格がみんな分かってしまう。そういう意味では面白いですよ。

——では、皆でゴルフを、ということで（笑）。

石川 それくらいのゆとりを持ってやったほうが、結果的には皆がいい研究をするのではないかと思います。仕事場を離れたところで人と交流することも絶対に大事です。そういう出会いがいっぱいできると、人間の幅を広げてくれるのですが、日本は一番出会いが少ない国ではないかという感じもします。

——先生のジュネーブ時代のように、パーティーを開いたりとか、ありませんね。

石川 ないでしょう。本当は、もっとそういうものがあっていいのではないかな。ちょっとおしゃれして皆で集まる機会というのも大事だし。もっと出会いを！ 歳を取ると、余計にそれを感じます。

——人づき合いが苦手だからと、尻込みして出ていかない人もいると思いますが、苦手なりに出たほうがいいですよね。

石川 中には本当に苦手な人もいるでしょうが、多くの場合、自分で自分を無理に縛っているだけではないかと思います。でも、人間は人の助けがなければ生きていけないわけで、だから自分も自分のできることをする。社会というのは、皆が取ることばかり考えたらうまくいかない。ちょっと気持ちの持ち方を変えて、自分にできることは何か、どう貢献できるかということを考えるのも大事ではないかなと思います。

——自分をちょっとかっこよく見せたいと構えたり、何か利益を求めて人と交わったりするのではいけないということですね。

石川 ヨーロッパに住んでいると、そういう精神を強く感じました。例えば、日本語で住所を書くときには国・県・市・町の順だけれど、向こうでは最初に○○町と書く。国は最後です。自分の最も身近な環境である町を最も大切にしていて、それに対して何ができるかを考えている。日本の場合は、何でもまずは国が決めてくれないと、国民はどう動いたらいいのか分からないという感じもあります。そういう発想をしているうちは、本当の意味で何かをよくすることはできないのではないか。だから今、どんどん若い人が災害ボランティアに行って働いているというのは、非常に頼もしく思っています。私だって、できたら行きたいと思う。やはり、一人ひとり、自分が積極的に何らかの貢献をするというのが、社会をよくしていくために一番大事ではないかと思っていますが、若い頃はつい、かっこよくしたがるからなあ。

——空気を読んで笑われないようにとか……。

石川 そう。そんなことは何もないのですが。でもまあ、周りを引っ張ってくれる熱心な人がいれば、それについていくのもパッシブな貢献だと思います。得意でない人は自分から名乗りを上げなくても、いい案だと思ったものに乗っかって一緒にやっていけば、世の中はもっとよくなるのではないでしょうか。

石川 烈（いしかわ・いさお）

1940年生まれ。歯学博士。 1965年東京医科歯科大学を卒業。 1968年からスイス ジュネーブ大学で助手を務め、1971年東京医科歯科大学大学院歯学研究科博士課程修了。その後、東京医科歯科大学で助手、講師、助教授を務め、1984年より同大学教授、2000年より同大学院教授となる。 2005年より同大名誉教授となり、この年より東京女子医科大学　先端生命医科学研究所の客員教授となる。現在は、同研究所の顧問として歯周病再生研究、後進の育成に力を注いでいる。